

学級におけるジェンダー・言語・身体を巡る権力交渉の分析

シフトする場と文脈の概念を用いて

宮崎あゆみ（お茶の水女子大学・国際基督教大学）

本発表では、日本の中学校における長期のエスノグラフィをもとに、どのように生徒たちが、場や文脈を解釈したり利用したりしながら、学校における日常実践を通じて伝えられるジェンダー・言語・身体規範とダイナミックな交渉を繰り広げたのかに関して、言語と権力と場や文脈がどのように連動するのかに関する欧米の理論を用いて分析する。

欧米の人類学では、文化および権力交渉における場や文脈の重要性が盛んに議論されてきており（e.g. Low & Lawrence-Zúñiga 2003）、言語人類学においても、言語権力交渉と場や文脈の関係が盛んに議論されてきた（e.g. Duranti 1997, Hill 1998）。本発表では、学級という場において、どのようにジェンダー・言語・身体を巡る文化規範に効率的に対応できるようなハビトゥス（e.g. Boudieu 1977）を形成しようとする日常実践が行われ、どのように生徒たちが場の論理に抵抗する様々な権力交渉を繰り広げていたかを分析することを通じて、どのように場と権力と言語が互いに構成し合うのかを明らかにする。

本発表では、生徒たちの多様な言語実践の中でも、いわゆる「女性語」「男性語」といった二項対立を超えたジェンダー・クロッシングな言語実践に注目する。日本語は、人称代名詞、終助詞、イントネーションなど多岐に渡ってジェンダー化されているとして、広く注目を集めてきた（e.g. Ide & McGloin 1990）。しかし、近年多くの研究者が、日本語話者の女性が実際に「女性語」を話しているわけではなく、「女性語」はむしろ女性はどう話すべきだという「言語イデオロギー」（e.g. Silverstein 1979）であると主張している（e.g. Inoue 2006）。発表者の調査校の女子生徒たちも、「アタシ」「ウチ」「ボク」「オレ」「オラ」「ワシ」などの多様な人称代名詞や自分の名前などの非人称代名詞などを一人称として使用しており、個々の生徒が、文脈や関係性により、多様な一人称を切り替えてもいた。生徒たちは、自らと他者のジェンダー・クロッシングな一人称実践を頻繁に評価し合い、格付けし合い、からかい合っており、そういったメタ語用的解釈（e.g. Silverstein 1993）を通じ、創造的な意味空間を構築していた。

一方で、教師たちは、いわゆる「女性語」「男性語」の二項対立から逸脱しないことが適切な学級ハビトゥスであるという規範を日常実践の中で伝えていたが、創造的な意味空間を構成する生徒にそのようなハビトゥスを植え付けることは困難を極め、日々権力交

渉を強いられていた。本発表では、「オレ」などのいわゆる「男性語」や自称「下品」文化を特徴とする反抗的な女子グループと担任教師との攻防の場面を分析する。例えば、帰りの会で司会をした女子グループの主要メンバーは、「オレ」のようなジェンダー・クロッシングな言語を使用し、教卓に寄りかかるなどの身体実践を行うことで、ジェンダー・言語・身体規範を巧みにかわそうとした。ド・セルト（1987）は、場の規範や規則を規定する権力を持ち、その場を支配するものを「戦略」と呼び、自分の場を持たず、他者の設定する場の中で臨機応変に自己の論理を貫く機会を狙うものを「戦術」と呼ぶ。帰りの会は、一語一語マニュアルが決まってさえる「戦略」の支配する公的な場所である。しかし、女子生徒たちは、私的な姿勢や言語を「戦術」として用いて、「フッティング（Goffman 1984）」をシフトさせ、ド・セルトの言葉を借りれば、「制度の基盤目を侵食してずらしていく海水のように」自分たちの私的な場を広げていた。

本発表では、このような生徒たちと学級規範をめぐる攻防をつぶさに考察することで、生徒という行為者と学級という規範生成の場や文脈が、ハビトゥスをスムーズに教授され内面化する一方的な関係ではなく、双方ともに働き合い、権力構造を揺り動かし、再構築するダイナミックな関係であることを明らかにする。言語は、このような複雑な関係性を分析する有効なツールであると言える。

【主な参考文献】

- ド・セルト, ミシェル. 1987. 『日常実践のポイエティック』, 国文社
- Inoue, Miyako. 2006. *Vicarious Language: Gender and Linguistic Modernity in Japan*. Berkeley: University of California Press.
- Silverstein, Michael. 1979. Language Structure and Linguistic Ideology. *The Elements: A Parasession on Linguistic Units and Levels*. P. R. Clyne, W. F. Hanks, C. L. Hofbauer, eds. 193-247. Chicago: Chicago Linguistic Society. University of Chicago.
- Bourdieu, Pierre. 1977. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goffman, Erving. 1984. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. New York: Harper and Row.

キーワード 言語人類学、ジェンダー、身体、場、学校、日本